

Peshawar-kai

ペシヤワール会報

ペシヤワール会事務局
〒810-0041 福岡市中央区大名
1-10-25 上村第2ビル603号室
TEL 092 (731) 2372
FAX 092 (731) 2373

No.96

2008年6月25日

〈URL〉 <http://www1a.biglobe.ne.jp/peshawar/>

〈E-mail〉 peshawar@kkh.biglobe.ne.jp



表紙絵 カーブル山の手の医院(画・甲斐大策)

自立定着村の創設に向けて	中村 哲
● 2007 年度会計報告	ペシヤワール会事務局
● 2007 年度農業計画報告 地域に広がり始めた試験農場の成果	伊藤和也・進藤陽一郎・山口敦史・高橋修
現地スタッフに聞く	村井光義
アフガン流、休日の過ごし方	近藤真一
ムッラーへの授業料	神代大輔
炎天下のチャイ休憩	松永貴明
近在の農民に支えられたセキュリティ	芹沢誠治
スタッフ一丸となって小さな命を救う	西野恭平
学校に通い始めたスタッフ	河本定子
人災と天災の荒野	福元満治
●ワーカーOB報告⑧ニジェールで植林教育とかまど作り	神戸秀樹

ペシヤワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

自立定着村の創設に向けて

第3期工事は「沙漠緑化」と「農地開拓」

これほど大規模な形で虚偽が根を張る時代もなかった。その結果か、一つの閉塞感が世界を支配している。世界を立て続けに襲う天変地異、世界規模の金融破綻、食糧不足が人為の錯覚を揺さぶり、人々に不安の運動を起こす。まぎれもなく、私たちは時代の大きな転換点を生きている。だがアフガニスタンで得た体験は、逆に私たちを楽天的にする。人間にとって絶対に必要なものは多くない。様々な評論と情報を組み合わせて、戦争の正当化が横行するが、一つの事実だけは明白である。「国際協力」と称する外国軍が何を守るのか不明だが、我々には守るべき人間としての営みがあることである。

PMS (ペシャワール会医療サービス) 総院長 中村 哲

二〇〇七年度の概況

無政府状態の拡大

〇七年度は、八八年のソ連軍撤退、〇一年のアフガン空爆に次いで、過去最も変動の激しい時期であった。欧米軍が約七万名に増派されて戦火は泥沼状態となった。アフガニスタンのほぼ全土で政府の威光は地に落ち、無政府状態が急速に広がった(〇八年初頭に発表された米情報部の報告でさえ「政府支配地区三〇パーセント」としている)。農村部で外国軍とその協力者が安全でいられる地域は、もはや消滅しつつある。アフガン東部では、米軍の協力者として振舞ってきたパシャイ民族系の軍閥たちも、タリバン勢力と妥協の道を探っているといわれる。多くの地域で、行政の末端にタリバン勢力の参加なしに秩序が保たれなくなっている。派手なふれこみで行われた「対テロ戦争」は莫大な浪費の挙句、その破綻は誰の目にも明らかになったと言えよう。餓えた膨大な人々の群れは、もはや沈黙しなくなってきた。破局は目前に迫っていると言っよい。

パキスタンに波及する混乱

混乱はパキスタン政府をも揺るがせた。米国の忠僕として「テロリスト掃討」を進めた

ムシヤラフ政権は、国民の怨嗟(えんさ)的となり、ブットー女史の暗殺、各地の暴動と反乱の後、政権から退いた。アフガニスタンと隣接する北西辺境州とペシャワールでは、事態はより深刻であった。〇七年夏、ワジリスタンに次いで、スワトやコハート地方で大規模な反乱が起きた。〇八年一月、ペシャワール近郊で政府も手をつけなかった一大麻薬組織がタリバン系の組織によって壊滅させられ、多くの人々に歓迎された。無政府状態は政府や米軍ではなく、地域住民の支持を得るイスラム主義勢力の手によって収拾される勢いを見せている。ペシャワール市内は平穏を保っているが、郊外は既にタリバン勢力とその同調者によって実効支配されていることは知られてよい。

米軍はアルカイダ勢力によるものと断じ、直接兵力を進めることをほのめかしているが、その信憑性は薄いと思える。アフガニスタン、パキスタン共にアラブ系団体に対する不信任が強く、民衆の間では、「アルカイダと米国の連携プレー」という噂まで横行している。過去、欧米におけるテロ実行犯は、ほとんどが先進国社会で育ったアラブ系のエリート層であり、欧米社会の病理こそがテロの温床だと識者たちは述べ、国際主義のアルカイダと徹底した土着主義のタリバン勢力とは、かなり性質が異なることを指摘してい



難民キャンプの青空学級で元気に朗読をする少女

る。二千万人のパシュトゥン民族を抹殺せぬ限り、タリバーン運動は消滅しない。いずれにしても、アフガン人やパキスタン人にとっては、迷惑な話だといわざるを得ない。この大混乱が「対テロ戦争」の産物だからだ。

アフガン難民強制送還と東部の混乱

パキスタン政府の「アフガン難民強制帰還」が本格化したのも、外圧によると言われる。難民キャンプが「テロリストの温床」とみなされて次々と閉鎖され、〇七年四月にペシヤワールのカッチャガレイ・キャンプが完全に撤去され、数万家族が路頭に迷うことになっ

た。続いて、シャムシャトゥウなど、貧困層が集まるキャンプが閉鎖されつつある。この影響をまともに受けたのが主に東部アフガン地域で、着のみ着のまま沙漠地帯に放り出された人々の集団が目立っている。カーブルでの復興劇をよそに、東部・南部のパシュトゥン人の地域は、無政府状態にさらに拍車をかけ、パキスタンに隣接するパクティヤ、パクティカ、ザール、ニングラハル、クナルルらの諸州では、飢えた数百万の民衆の怒りが暴発寸前だと誰もが見ている。冬季、カーブルを中心に発生した数万人の凍死者は、主にこれらの人々であった。

早魃の進行と「国際社会」の無知

アフガニスタンの民衆にとって、政情以上に脅威なのは、大旱魃による食糧不足である。既に〇六年の段階で「食料自給率六〇パーセント以下(WFP「世界食糧計画発表表」)とされたが、農地の沙漠化は目を覆うものがあり、〇七年秋、東部アフガンではコメ・トウモロコシの収穫はさらに壊滅的な打撃を受けた。これに世界的な食糧危機が重なり、イランやパキスタンからの小麦輸入が一時停止した。主食である小麦価格は二倍以上の高値を維持しており、カルザイ大統領自ら「国民の半分が飢えている」と訴えたが、欧米側は徒らに軍事力強化を図るに終始し、真剣な取り組

がなされたとは言えない。この食糧不足が容易に暴動に発展し、収拾のつかぬ事態になることは十分予測される。首都を大混乱におとし入れるのは困難ではない。しかし、農村を基盤とするタリバーン側も、現在のところ混乱を望まず、「外国軍とその同調者だけを標的とする」と宣言、自重していると思われる。一方、欧米軍のPRT(地域復興支援)の実態は、軍事活動を円滑にするための宣撫工作に近いもので、民衆は反感を抱いている。国連組織さえその「手先」としてしばしば住民から襲撃され、面の世界で展開する実態は、日本で理解されているものとはかけ離れている。

特に〇八年になって、ライス国務長官が「ISAF(国際治安維持軍)は戦闘部隊であるべきだ」と明言、主力のNATO軍に積極的に参加してきた国々の中にも、軍事力による収拾に懐疑的な声が始まっている。また、ことさらイスラム教を冒瀆するような欧米側の動きには、宗教的偏見を感じざるを得ない。モスクやマドラサ(寺子屋)を平気で空爆するのが日常茶飯事となり、米軍がコーランを標的に射撃訓練したり、「反対を押し切ってデンマークがムハンマドを揶揄する出版物を刊行したりで、激しい反感を買っている(四月、カーブル市内の官邸の前でカルザイ大統領暗殺未遂事件、五月、イスラマバード

のデンマーク大使館が爆破され、外国兵への襲撃と死亡は、過去六年間で最高に達することは確実視されている。

民衆の間で餓死と凍死が相次ぐ中、一部には華美な風俗が人々の慣習を無視して横行、これまでになく欧米人への敵意が高まっている。首都カーブルを一步離れると、パシュトゥン人を中心に、全土でイスラム主義勢力への支持が圧倒的であることは知られてよい。

対日感情の動き

日本国内で議論が沸騰した「インド洋での後方支援II給油活動」は、幸いほとんど現地では知られておらず、「最大の民生支援国」であることが政府・反政府を問わず、好感を持って迎えられていた。在日アフガン大使も、日本が（アフガンの国土に）兵力を送らぬことを望むと述べている。このことが私たちにとって大きな安全になっていたのは疑いがなく、しかし、六月になって「日本軍（Japanese Troop）派遣検討」の報が伝えられるや、身辺に危機感を感じるようになった。余りに現状を知らぬ軽率な政治的判断だったと言わざるを得ない。日本が兵力を派遣すれば、わがPMS（ペシャワール会医療サービス）は邦人ワーカーの生命を守るために、活動を一時停止する。これまで、少なくともアフガン東部で親日感情をつないできた糸が切れると、自衛隊はもち

ろん、邦人が攻撃にさらされよう。私たちはアフガン人が「故郷を荒らす日本兵」を攻撃するのを止めることができな。悲しむべきことだが、これが冷厳な現実である。この末期の段階で軍事行動に協力する愚かさの帰結を、身にしみて知ることになる。

PMS（ペシャワール会医療サービス）現地活動への影響

わが現地活動も、このような政情と食糧危機に大きく振り回された。これほど難問が重なった年も珍しい。列挙すると、

一、食糧価格の急激な高騰で、この一年で五回の昇給をくりかえして対処したが、職員たちの中には、一ヶ月の給与で半月しか家族を養えぬ者も少なからず、その生活保障が問題となってきた。

二、要人・外国人拉致が多発し、〇八年三月以来、カイバル峠のトルハム国境通過がパキスタン・アフガン両政府によって禁止され、ペシャワールPMS病院とジャラバード支部との連絡が途絶えがちとなり、管理体制が次第に困難になってきた。

三、先進国のシステムを性急に導入しようと、アフガン社会の伝統を無視した「診療所改善命令」が出され、一時はアフガンのダラエヌール診療所が危機に瀕した。パキスタンの北端ラシクト診療所も活動を停止した。



用水路にかかる橋に集まった子どもたち

四、ペシャワールを本拠とするPMS病院は、「難民救済団体」として合法性を得ていたため、パキスタン政府の定めた期間（二〇〇九年十二月までに難民を帰す）内に、ジャラバード側へ移転を迫られている。

五、日本人ワーカーのビザ発給をパキスタン政府が制限するようになり、著しく業務に支障を来し、ワーカーの受け入れが困難になっていく。

六、アフガン国内の治安悪化に対する「危機対策」を自力で講ぜねばならなくなった（これまで農村部住民の信頼関係に基づいて、その保護に頼ってきたが、日本政府の動き

二〇〇七年度の現地活動の概要

次第では、その保証もなくなる。

しかし、この中であつても、事業そのものは粘り強く継続された。医療事業はPMS病院、ダラエヌール診療所共に多大の労力を払つて患者の診療が継続された。一時早期移転を迫られたベシャワール病院本部は、活動許可を与えられ、一年半後の移転を目指して、診療の質の向上に努力が傾けられている。

水路事業は、〇七年四月に第一期十三キロメートルを完成、連続して第二期八・五キロメートルの突貫工事態勢に入った。〇八年春に大混乱が起こると予測し、ベシャワール会の基金すべてを費やして、早期完成が指示された。工事は驚異的な速さで進展、〇八年現在、うち五・五(総延長一八・五)キロメートルを完成、工事先端は最終地点二一・五キロメートルに近づいている。

農業関係では、五年間の地道な成果が上がりつつあり、サツマイモの普及、悲願の茶の生産の見通しが立ってきている。また、地域共同体復興の要ともいふべき「マドラサ(伝統的な寺子屋)」の建設に着手した。

東部アフガンから外国人の姿が消えたが、私たちは日本人ワーカーの安全に万全を期し、地方政府内の好意と、住民たちの保護で仕事の継続が可能となっている。「無政府状態」と

はいえ、地方農村共同体の秩序はまだ保たれており、政治的中立を掲げる限り、党派を超えて保護されている状態といえる。

1. 医療事業

政情の変化を受けて、活動が大幅に制限された。アフガン側ではベシャワールからの外国人の陸路交通が禁止され、連絡が途絶えがちになった。また、「乳幼児死亡率を下げる」として、矢継ぎ早に出されたアフガン保健省の方策は、分娩室の設置を求めるなど、家庭出産が普通である山村の診療所に合わず、多少の混乱があった。それでも、ダラエヌール診療所は西野医師らの常駐によって、著しく改善された。〇七年度はPMS基地病院を中心に、ダラエ・ヌール診療所で二七、二六三名が診療された(別表1-3)。

一方ベシャワールのPMS病院は、二〇〇七年四月にパキスタン政府から出された事実上の閉鎖要求で、一時混乱したが、結局二〇〇九年十二月に難民を完全に帰すまで存続し得る」という許可を得た。余裕を与えられて、現在ジャララバードへの移転が少しずつ準備されている。しかし、一時取りざたされたように、決して閉鎖ではないことを強調したい。東部アフガンとパキスタン・北西辺境州は事実上一体であつて、患者たちは簡単に国境を越えてやってくる。少なくともハンセ

、病患者診療については、日本が自衛隊を派遣せぬ限り、考えられるほど大きな影響が出ることはない。

2. 水源事業

①水路建設

二〇〇三年三月に着工した全長十三キロメートルの水路は、二〇〇七年四月、四年の歳月をかけて第一期工事を完了した。第二期は六・八から八・五キロメートルに延長され、直ちに工事が始まった。既に無政府状態で治安当局からしばしば警告があり、〇八年に日本人ワーカーを退去させざるを得ない事態を想定、「いのちの基金」全てををほたいても敢行すべく、これまでにない大掛かりな工事が急ピッチで進められた。

しかし、第二期工事ルートも予想以上の難所が多く、切り通しトンネル、三つの貯水池造成、土石流の渓谷通過、大がかりな岩盤巻き上げ工事など、多大な努力が払われた。予定した年度内完成は実現できなかったが、〇八年五月現在、五・八(総延長一八・八)キロメートル地点までを完成、灌水が始まった。工事先端は予定の二一・五キロメートル、最終目的地の「ガンベリーー沙漠」に達した。〇八年秋までに完成することは確実になった。この結果、広大な面積(約一五〇〇町歩)がマルワリード水路(Upan Canal)の直接灌漑に

表1.各診療所の治療数

診療所	外来数	外傷治療数	入院数
PMS 基地病院	33,691	3,471	995
ラシュト診療所	1,985	82	0
ダラエ・ヌール診療所	27,263	1,165	-
計	62,939	4,718	995

表2.各診療所の診療数と検査件数

国名	パキスタン		アフガニスタン
	ベシャワール	ラシュト	北東部山岳地帯
地域名	PMS	ラシュト	ダラエ・ヌール
病院・診療所名			
外来患者総数	33,691	1,985	27,263
【内訳】 一般	32,620	1,983	26,258
ハンセン病	74	1	0
てんかん	528	0	230
結核	167	0	0
マラリア	302	1	775
入院患者総数	995	0	-
【内訳】 ハンセン病	98	0	-
ハンセン病以外	897	0	-
外傷治療総数	3,471	82	1,165
手術実施数	0	0	-
検査総数	15,391	0	1,056
【内訳】 血液一般	2,810	0	94
尿	2,828	0	136
便	2,126	0	101
抗酸性桿菌	408	0	8
マラリア・リーシュマニア	1,487	0	716
その他	5,732	0	1
リハビリテーション実施総数	5,029	0	-
サンダル・ワークショップ販売総数	9	0	-

表3.PMS 病院検査数の内訳

血液	2,810
尿	2,828
便	2,126
らい菌塗抹検査	114
抗酸性桿菌	408
マラリア血液フィルム	1,409
リーシュマニア	78
生化学	1,303
レントゲン	675
心電図	205
超音波断層写真	1,131
病理組織検査	26
体液(髄液・胸腹水等)	10
その他	2,268
小計	15,391

浴し、数カ月後に沙漠に灌水が始まると計三千町歩が耕作地となる(左ページ概念図参照)。二〇〇七年秋から冬にかけて、東部アフガニスタンは異常な川の低水位、少雨に襲われた。東部一帯はコメとトウモロコシの収穫が壊滅に近かった。ジャララバード北部の最大の農村、シェイワ郡とベスード郡を潤す用水路の取水も困難となり、一時は危機的な状況であった。シェイワでは自然河道の回復と堅牢な取水堰の建設が行われ、ベスードでは大掛かりな堰上げ工事が行われた。この結果、他地域で飢饉が進行する中、両者で計四五〇町歩がかるうじて救われ、平年より二五パ



シェイワの取水口の完成セレモニーで挨拶する中村医師



第二期工事概念図

ーセント増の小麦収量を得た。
第二期工事の詳細は別表5に譲る。

②井戸事業

二〇〇七年四月に飲料水源は一五五〇ヶ所を超えた。しかし、水路沿いを除けば、地下水位の下降は依然として続いており、楽観はできない。

新たな試みはマルワリード用水路からの汲み上げポンプなど、地表水の有効利用に希望

をつないで仕事が進められた。

3. 農業関係

五年を経たダラエ・ヌールの試験農場は、地味ではあるが着実な成果を上げた。サツマイモの普及は勢いづき、確実に人々の間に浸透している。日本米の導入は意外な結果を生み、収量が現地米より五〇%増産できることが実証されたが、地元と異なる脱穀技術の

導入などに大きな努力が払われた。パキスタン・スワト地方で過去に日本米が定着した例もあるので、大いに希望が持たれる。

アフガニスタンは緑茶の最大消費国にもかかわらず、全て輸入である。ケシに代わる有望な換金作物として、試行錯誤が繰り返されてきた。〇六年から栽培地をダラエ・ヌール渓谷の高地に移してから希望が見え始め、〇七年度は初の小規模な「出荷」が行われた。特筆すべきは、試験農場よりも近辺の農家に配布したものが活着率良好とのことである。今後はアフガン高地沿いに自然に拡大することが期待される。詳細は、農業担当者の報告に譲る。

〇八年度は次に述べる日本人ワーカーを取りまく情勢のため、規模縮小はやむを得ない。しかし、仮に一時的な空白期間が生じても、一旦受け入れられたものが如何に存続、拡大するかを覗る良い機会にもなり得る。〇八年度、農業班の主力は、後述の自立定着村の開拓事業に移り、大がかりな植林と共に、食糧生産の向上を本格化、水路事業と事実上一体化される。

4. ワーカー派遣

以下のワーカーが事業に参加した(表4)。
〇七年度は、〇八年春以降に生じ得る政情の混乱を想定、積極的なワーカー募集は行わ

かった。○八年度は特にジャララバード常駐の日本人ワーカーを段階的に減らし、速やかな退避ができるよう配慮する。九月までに用水路に多かったワーカーを半減し、年内に用水路関係は私とアフガン人だけで回せる態勢を目指している。大がかりな食糧暴動と略奪の発生や農村地帯の戦場化、日本の陸上自衛隊派遣の決定があれば、速やかに全員を退去させる。

5. その他

シエイワ郡に復活した農村では、多くの帰還難民で人口が増加、地域の要となるマド拉萨が農村共同体の復活に不可欠となった。このため、地元農民とニングラハル州政府の懇請を入れ、○七年十二月輸入式を行い、本格的工事が○八年三月から始まった。○八年度には六百名を収容できるモスク、四百名の学童が学べる校舎を完成する予定。ジャララバードにあふれる戦争孤児たちも、ここで多数を吸収、教育の機会を与え得る。寮は時間と予算の関係で、○九年度に予定している。マド拉萨の運営は、地域あげて住民たちの手で行われる。

二〇〇八年度計画

事業は基本的にこれまでの連続であるが、新しいものとして「自立定着村」がある。

表4. ワーカー派遣事業

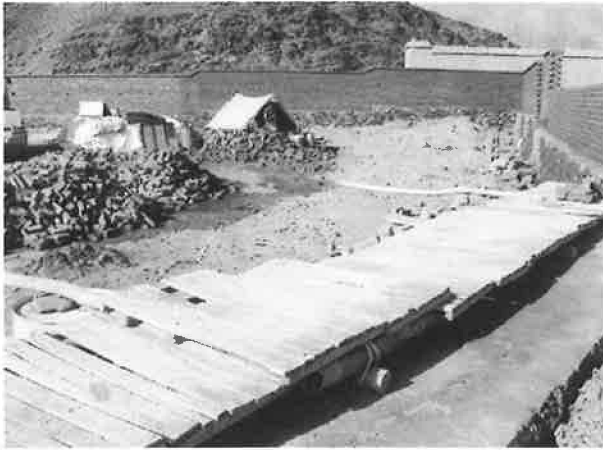
◎医療			
1	藤田 千代子	院長代理・看護部長	91年9月 継続中
2	坂尾 美知子	臨床検査技師	02年7月 継続中
3	杉山 大二郎	ダラエヌール診療所受付薬局	05年2月 継続中
4	村井 光義	会計	05年3月 継続中
5	河本 定子	薬局	05年9月 継続中
6	西野 恭平	ダラエヌール診療所医師	07年5月 継続中
7	宇都宮 雄高	看護師	08年2月 継続中
◎灌漑用水路建設計画・農業計画			
8	近藤 真一	用水路	03年1月 継続中
9	伊藤 和也	農業	03年12月 継続中
10	本田 潤一郎	用水路	04年1月 07年12月終了
11	松永 貴明	用水路	04年4月 継続中
12	進藤 陽一郎	農業	04年5月 継続中
13	鬼木 稔	用水路	04年5月 07年12月終了
14	芹澤 誠治	事務	05年4月 08年5月終了
15	横山 尚佑	用水路	05年9月 07年11月終了
16	木薮 健児	用水路	06年5月 07年5月終了
17	連岡 修	用水路	06年8月 07年6月終了
18	西 和泉	支部会計	06年9月 07年6月終了
19	長橋 努	用水路	06年12月 07年5月終了
20	竹内 英允	事務	06年4月 08年4月終了
21	神代 大輔	支部会計	07年2月 継続中
22	西山 浩司	事務・炊事担当	07年3月 07年8月終了
23	山口 敦史	用水路	07年3月 継続中
24	佐々木 啓泰	用水路	07年4月 継続中
25	梅本 靈邦	用水路	07年5月 07年11月終了
26	石橋 周一	用水路	07年5月 08年4月終了
27	藤澤 文武	用水路	07年7月 継続中
28	山中 正義	事務	08年2月 継続中
◎定期・短期派遣者			
29	高橋 修	農業顧問	02年3月 定期
30	石橋 忠明	用水路	03年12月 定期
31	紺野 道寛	用水路	03年7月 短期
32	鈴木 学	用水路	03年3月 短期
34	鈴木 祐治	用水路	03年6月 短期

用水路は第二期工事二・五キロメートル地点までを八月中に完成予定、その後は難工事が無くなり、人力とトラクター程度で工事可能な第三期工事に入る。第三期工事は事実上、「沙漠緑化」と「農地開拓」である。このため、幅一〇〇メートル以上、長さ二・五キロメートルの砂防林造成を同時に進めている。食糧危機が当面去らぬことを想定、PMS職員や用水路建設に長く従事した熟練作業員（ハ沙漠化で生計手段を失った近隣農民）を定住させ、「水路関係の職能集団の村」として

自給自足、今後の水路保全に当たらせる計画を実現する。農業班も、これまでの経験をここで大々的に生かすことができる。

また、アフガニスタンが現状のまま推移すれば、現金給与はいずれ意味を持たなくなり、食糧自給で生活を保障する以外に方法がなくなる。外国人が去った後も、用水路の保全は何世代もかけて地元民自らの手で行われるものであるから、これが水・農業計画の最後で不可欠の仕上げとなる。

全体に○八年度は、日本人ワーカーの不



建設中のマドラサ(伝統的寺子屋)

早いもので、〇八年度を以って私たちの現地活動は、四分の一世紀を経ることになる。二五年間が夢のようである。この間、さまざまな出来事に遭遇した挙句、遠い日本とアフガニスタンとが、現在のような形でつながる

在で、事業の一次的縮小または停止はやむを得ない。事は長期的視野で実施されるべきで、一時の騒乱状態が去れば、再開される。とはいえ、日本が軍事的関与(ISAFF)国際治安支援部隊に参加)せず、早く外国軍が去って平和が戻ることを祈るばかりである。

二〇〇七年度をふりかえって

表 5. 用水路第二期工事の概要

- ①水路の名称 マルワリード用水路(Marwarid Canal, Marwarid はペルシャ語で「真珠」の意。通称 Japan Canal)
- ②全長 8.6 キロメートル
- ③場所 アフガニスタン国内ナンガルハル州シェイワ郡ブディアライ村から同郡シギ村まで
- ④平均傾斜 0.00073
- ⑤標高差(落差) 6.3 m (K池貯水池末端 624.30 m、シギ村ガンベリー沙漠 618.00 m)
- ⑥予定流量 3.0 ~ 5.0 m³/sec. (限界最大量 6.0 m³)
- ⑦推定損失水量 30% (浸透損失 20%、無効水 10%)
- ⑧灌漑給水能力 2.5 ~ 4.5 m³/sec. (400,000 m³/day)
- ⑨推定灌漑可能面積 約 5,000 ヘクタール(約 5000 町歩*)
- *すでに灌漑している耕地と給水量から算出。土壌の保水性、作付けの相違で、日本の基準とは必ずしも一致しない。
- ⑩水路沿い植樹総数 約 10 万本
- ⑪設計・施工者 PMS (ペシャワール会医療サービス)
- ⑫工期(第二期工事) 2007年4月~2009年3月

区域	長さ(m)	開水路幅 (底部~上部)	平均 傾斜	水路 1.0 m 時の 流速と流量		コンクリート構造物				工種と主な付帯工事
				流速(m/秒)	流量(m ³ /秒)	橋	切り通し	サイフォン	水門	
L	1,350	4.5 ~ 10.0 m	0.001	1.32	6.6	1	1	1	2	岩盤掘削と盛り土による造成。切り通し；長さ約 90 m、鉄筋コンクリートで掩蔽、トンネル化
M	1,260	6.0 m	0.001	1.46	7.3	1		1	3	M貯水池；長さ約 450 m、土手の長さ 20 m、幅 50 m で 4 段分割。土石流は緩流化して摂水
N	2,190	6.0 m	0.001	1.37	8.2	1			1	扇状地約 1.5km の横断
O	1,000	4.5 ~ 10.0 m	0.001	1.26	7.6			3	1	O貯水池；長さ約 200 m。完成
P	950	5.0 m	0.001	1.16	6.5		1		1	急峻な崖地の長い切り通し。約 500 m。工事中
Q	1,850	6.0 m	0.001	(未定)	(未定)				1	工事中。崖沿いの土手造成。コンクリート構造物は完成
総計	8,600					3	2	5	9	

注 1；詳細は完成時に報告 注 2；シェイワ取水口、ベストの堰は後日、測量の上報告



自立定着村を建設するガンベリー、右下隅が21.5km地点

とは夢にも思っていなかった。古い社会体制の打破を叫んだ都市青年層がソ連軍の干渉を招き、その反動を育成した米国自身が今、同様な「国際正義」を掲げて泥沼の戦争に手を焼いている。かつて一万二千名の兵力は七万名に迫り、「対テロ戦争」は末期的な段階であると言えよう。

激変を被ったのは日本も同じである。

二五年前、平和教育が叫ばれ、太平洋戦争の戦火をくぐった世代がまだ社会の中堅にいた。日本の文化や伝統、日本人としての誇り、平和国家として再生する意気込み——もうそれは幾分錆^{さび}ついてはいたが、一つの時代の

精神的気流をなしていた。私たちはそれに従って歩めば、それで大過はないと信じていた。だが、現在を見渡すと今昔の感がある。進歩だの改革だの言葉が横行するうちに、とんでもなく不自由で窮屈な世界になったとさえ思われる。

図らずもアフガニスタンでの体験を通して、これだけ通信・交通手段が発展しながら、情報コントロールが可能なることを思い知らされた。その時代の錯覚の中で生きざるを得ないのは、いつの世でも同じなのだ。つかの間の平和は、戦争と戦争の間の小春日和であったにすぎない。人々は昔と変わらず、騙されやすい。「大衆は愚かである。同じことを述べて信じ込ませることだ」と述べたのは確かヒトラーであったが、哀しいかな、事実である。愚かな戦を積極的にでも消極的にでも受け入れる世情に対し、いささかでも逆らうことに世間は冷淡である。平和の声は細りがちである。

しかし、これほど大規模な形で虚偽が根を張る時代もなかった。その結果か、一つの閉塞感が世界を支配している。世界を立て続けに襲う天変地異、世界規模の金融破綻、食糧不足が人為の錯覚を揺さぶり、人々に不安の運動を起す。まぎれもなく、私たちは時代の大きな転換点を生きている。だがアフガニスタンで得た体験は、逆に私たちが楽天的にする。人間にとって絶対に必要なものは多く

ない。様々な評論と情報を組み合わせて、戦争の正当化が横行するが、一つの事実だけは明白である。「国際協力」と称する外国軍が何を守るのか不明だが、我々には守るべき人間としての営みがあることである。

○八年度もこの視座を失わず、心ある人々と力を合わせ、活動を積み重ねてゆきたい。

中村哲(なかもとつとむ)

九州大学医学部卒。専門Ⅱ神経内科(現地では内科・外科もこなす)。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十三年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保(井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千四百ヶ所以上)事業を実践。さらに〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、〇三年三月からは灌漑水利計画に着手、〇七年三月第一期工事完成。年間診療数約六万人(二〇〇七年度)。

2007年度の主な収支

寄付を頂きました団体の御名前につきましては紙面の都合上、割愛させていただきます。
 期間 2007年4月～2008年3月

07年度会計報告

一般会計(単位:円)

[収入の部]	
1 会費・寄付	266,541,760 ①
2 補助金等	0
3 利息雑収入	676,628
4 その他収入	25,171
5 基金より繰入	200,000,000
年度収入計	467,243,559
前年度繰越	4,659,445 ②
収入計	471,903,004

[支出の部]

1 現地協力費	451,216,796
うちPMS運営費	13,008,420 ③
井戸掘り事業	1,654,122 ④
農業支援事業	968,266 ⑤
灌漑用水路	396,908,659 ⑥
アフガン事務所	9,763,354 ⑦
現地ワーカー費	15,446,300 ⑧
渡航費	8,386,900
国内活動費	5,080,775
2 広報費	5,929,647
3 事務局費	9,870,536
年度支出計	467,016,979
次年度繰越	4,886,025
支出計	471,903,004

- ① 個人会費寄付(個人一、九二四八件・団体九〇件)
- ② 「いのちの基金」から繰入
- ③ ベキステンアフガンセンター診療所
- ④ 飲み水等供給事業
- ⑤ 作物育成試験等
- ⑥ 農業用灌漑用水路建設
- ⑦ ジャラバド事務所
- ⑧ 日本人ワーカー費(滞在費、通信費)

収益事業会計

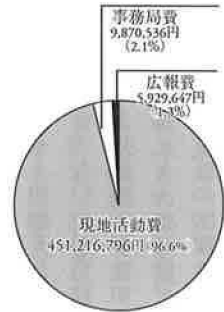
[収入の部]	
書籍売上	468,826
ビデオ売上	4,000
雑収入	700,200
売上収入計	1,173,026
[経費の部]	
書籍原価	
雑費	402,855
送料等経費	567,000
租税公課	178,000 ⑨
経費合計	1,147,855
当期収益(一般会計繰入)	25,171

「いのちの基金」残高

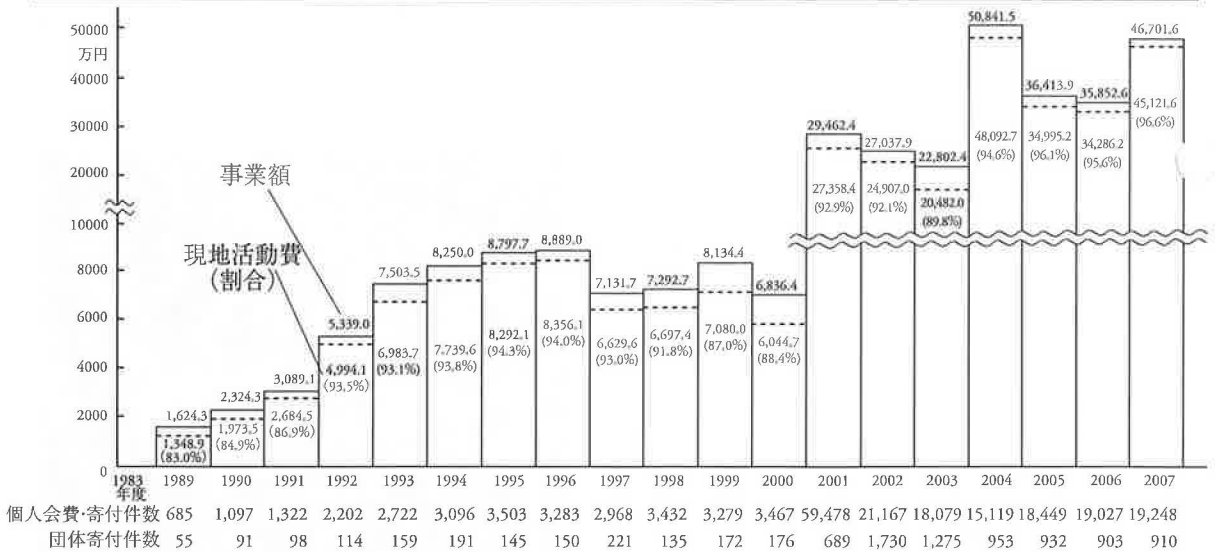
期首残高	450,000,000
一般会計へ繰入	200,000,000
緊急時運営積立金	100,000,000
期末残高	150,000,000

未使用切手、書き損じ葉書の寄付
 寄付いただいた件数 1,020件
 未使用切手枚数 35,687枚
 同 金額 2,993,677円相当
 書き損じ葉書枚数 28,046枚
 同 金額 1,357,688円相当
 合計金額 4,351,365円相当
 *会報発送費用等の節約になっています。

●2007年度事業額(支出ベース)
467,016,979円



事業規模(寄付件数・事業額)の推移 1983~2007(年度)



◎二〇〇七年度農業計画報告

地域に広がり始めた試験農場の成果

農業計画現地担当 伊藤和也・進藤陽一郎・山口敦史 農業指導員 高橋修

はじめに：大盛会の収穫祭

昨年の一二月、ダラエヌールのカライシャヒ・ブディアライ両試験農場で収穫祭を開催しました。提供した食事のメニューは、現地風に調理された日本米と大豆、サツマイモの蒸かしとチップスなど、ほとんど試験農場の生産物を使った料理です。地域の長老達を始め大勢の農家が参加して大盛会となりました。この一年間、試験成果を地域へ広める役割を担ってくれた農家達のおかげで、賑やかな収穫祭を行うことが出来たことを有り難く思いながら、以下、各作物の地域への普及状況を中心にこの一年の活動を報告します。

現地品種の一・五倍 日本米の収量に大反響

収穫祭のメインディッシュに用いた日本米は、昨年四二戸の農家が栽培しました。試験

農場では三年続けて一〇アール（一千平方メートル）当たり六〇〇キログラム弱の高収量ですが、周辺農家でも四五〇キロから五〇〇キロという、現地の平均からすると一・五倍以上の高い収量を上げ大評判となりました。農家の食料を豊かにするだけでなく、あわよくば日本人ワーカーの食卓で毎日日本米を食べられればと、若干利己的な動機も交えて普及に踏み切った我々としては本当に嬉しい結果です。

しかし問題もあります。日本米は乾燥時の高温によって碎け米が発生しますが、現地の慣例よりも田植を遅くしたり、直射日光に当てすぎない乾燥方法にするなどの工夫により、大分解決の目途がつけられました。しかし彼らにとっては碎け米の発生よりも日本米特有の脱穀の困難性の方が厄介な問題のようですので、図面を見ながら「千歯せんばこき」を試作



日本米も供された試験農場の収穫祭

し、より容易な脱穀作業を目指してきました。農家から「日本で戦前に使っていた道具を今更アフガニスタンに持ち込むとは怪しからん！」などと冷やかさもありませんが、使い慣れるにつれて楽しそうに作業をしています。実は、千歯こきは江戸時代の道具であることは伏せてあります。

なお今年も、農家の要望に応じてキャナル流域にも日本米を普及していく計画です。

収穫祭のメニューのもう一つの狙いは、今年特に普及していきたいと思っっている大豆の料理を多くの人に味わってもらおうことでした。「畑の肉」と呼ばれるほど栄養価の高い大豆ですが、実際に食べて知ってもらおうのが最上



日本米は予想以上の収量

の方策と考えたからです。反応は上々で、普段「お前らが来いって言うから来てやったんじゃ、早く飯は出さんのか？」と文句しか言わない爺様達も、「この豆は美味い」「種をくれるなら是非うちでも栽培したい」「畑の畦周りに植えてみようと思うがどうじゃろ？」と好印象を示してくれ、こちらからも「どんな種を増やすからは是非栽培して下さい」と宣言しました。

大豆は播種時の土壌水分を調節して発芽さえすれば、乾燥にも強く僅かの肥料で良く育ち、一〇アル当たり二〇〇キロ前後の高い収量を出せる目途がついています。今年採種用の栽培面積を倍増し、より多くの食卓で食べてもらえるように備えていきます。

飼料作物ではエン麦が突出した好成绩

これまでの取り組みで夏期にはソルゴー、春から秋にかけてはアルファルファ、また冬期においてはエン麦が有望と認められ、それぞれ昨年より普及に努めてきました。

特にエン麦は、①飼料が不足する冬期から春先にかけて二〜三回の刈り取りが可能であり、②現地で一般的に栽培されている小麦や牧草と同じ要領で栽培が可能である、③また容易に自家採種ができる、という三点で農家の評価が高く、一般農家への普及も順調に進行中です。昨年の秋に試験農場の近くの農家五〇戸を選定して種子を配布したところ、いずれの農家も良い成績を収め、「うちの畑では三回刈れたぞー」「いやうちでは四回刈って更に伸びているー」「見ろ！うちはクロパーと混ぜて育てたら冷害がなかったー」、などと農家同士が自慢話を通じて無償の広報活動を担ってくれ、大幅な普及拡大へ向けての手応えを感じています。

一方アルファルファとソルゴーは、毎年数戸ずつに種子を提供してきましたが、刈り取りできる生草量の多さから年ごとに人気が高まっています。現在数十戸の農家からの希望に対して種子配布が追いつかない状態です。そこで今年アルファルファの採種圃場を倍増し、またソルゴーは採種栽培用の種子を更

にし、彼らの期待に応えるように努力をしている最中です。

現地では必ずどの家でも牛・ヤギ等を飼っているため、家畜飼料の確保は主食用の作物と同等に生活内容を左右する重要な案件です。我々は小規模の農家でも十分な飼料確保が達成されることを目的とし、現在、ここに取り上げた三種の飼料作物の普及に必要な種子の生産を急いでいます。

除虫菊に注目集まる

除虫菊は日本では蚊取り線香の原料として知られていますが、現地ではマラリア蚊防除と農薬の自給という二つの効用が狙える貴重な作物です。実のところ当初我々は除虫菊と野草との区別すらつかず、せっせと野草も一



マラリア蚊防除対策として期待される除虫菊

緒に世話をしました。誠にお恥ずかしい限りです。苦勞の甲斐あってこの春見事に美しい白い花を畑一面に咲かせてくれ、試験農場の目玉の一つになりました。

面白いのは、見かけによらずというべきか、あるいはいつも目に映るものに色気がないからか、除虫菊は農家のオヤジ達に大変好かれており、頻繁に除虫菊畑の周辺にたむろする姿が見られます。

実は除虫菊は虫除けの効果と同時に、アマガニスタンのひげオヤジを呼び寄せるフェロモン効果もあったのかなどと勝手に納得しつつ、今年は夏の耐暑性、採種の方法などを確かめる期間として栽培を続けていきます。

ついに始まった製茶

今から五年前、二〇〇三年の一月にパキスタンの試験場から貰った苗を定植した茶園と、二〇〇五年に日本で寄贈頂いた種子から育てた北部集落の茶園で、念願の春一番茶が大々的に摘み取れたことは今年一番のニュースです。製茶は茶園の近くに竈かまどを設け、初めての緑茶作りを興味深そうに見つめる周辺の農家に囲まれながら、賑やかに製茶作業を行うことができました。

お茶栽培のかねてからの課題は、夏場の高温とアルカリ土壌障害への対策ですが、夏場の高温に対しては、これまで遮光用にソルゴ

ーを壁のように生やしていたのに対し、今年からは杏あんずの木を茶園内に均等に植え付け、恒久的な遮光を得られるようにしたり、逆の発想で農家の杏園に茶を植え付けたりという試験を開始しています。

もう一つの課題である土壌のアルカリ性の調整については、現在なお解決の見通しが立っておりません。茶の木が枯死してもおかしくないペーハ値を示す畑ですが、茶摘みができるほどに成長してくれ本当に驚いています。ここまでくるともはや人知の及ばざるところ、アツラーの神様が手助けをしてくれているのであろうかなど、農家と多少冗談めかして話し合っております。

それはそれでアツラーの神の見えざる手助けを有り難く頂きながら、お茶好きのアフガン人が毎日飲むお茶を少しずつでも自給できるように頑張っています。

幻のブドウ・ついに収穫へ

ブドウはこれまで毎年、実る寸前になるとことごとく近隣の子供達に盗み食いされ、悔しい思いをしながら肝心の食味が分からない幻のブドウの世話を続けてきました。昨年は心を鬼にして子供達を追い散らしましたが、やはり盗み食いが止まらないので本当の鬼になってやろうかというところまできました。今年はずいにたわわに実った子実を収穫



ダラエヌールのお茶畑と進藤ワーカー

できる見込みとなりましたので一転気が和み、我々もアツラーの神ならぬ仏の心になりました。この会報が皆様の手に届いている頃には、きっと念願のブドウを「美味しい」と農家達と一緒に味わっているはずであります。

また、これに先んじて、新たに剪定した枝を使った挿し木苗を生産する試験を開始しました。すでに苗木配布の要望も多く寄せられており、乾いた農村の生活に甘い潤いを届けることができる日を待ち望みながら、今後苗木の増殖に努めていきます。

サツマイモを腹一杯食べてもらえるように

この冬は特に厳しい寒さの中で種芋かぶいもの保存を終え、ようやく苗の芽が出た時にはホッとしました。これで我々の試験農場が二年続け



救荒作物として期待されるサツマイモ

てサツマイモ苗の生産・配布センターとして機能し、普及も軌道に乗ってきました。

昨年は二六戸の農家が試験農場から提供した苗でサツマイモの栽培を行いました。今年も新規に有志農家を選定しながら普及に努めています。サツマイモの栽培が成功するコツは、できるだけ早い時期に植え付けることと分かってきました。試験農場では一〇アール当たり二千キログラム弱の収量を得、目標の二五〇〇キロに大分近づいています。

種芋保存に関しては、麦藁わらやトウモロコシの茎などで縦穴を覆って保温するという簡素な方法で九割以上の種芋を保存することができ、ようやく温度管理の目途がつかいましたが、課題は、農家自身の手によって冬場の種芋保存と苗作りを実現することです。今年には有志

農家個々でも種芋を保存するよう、手助けをしていきたいと思っています。もう一方の苗作りは、二年続けて有志農家で実践している簡易育苗法がまずまずの成績ですので、この方法を基に普及を図っていきます。

サツマイモは同じ栽培面積で水稲の二倍以上の人口を養うことが可能な救荒作物としての一面も持っています。あるいは日本で食糧難の時代をサツマイモと共に過ごされてきた年輩の方々は「もう芋は結構。一生分食べました」と苦笑されるかもしれませんが、今や現地でのサツマイモへの人気は非常に高く、例えば昨年の収穫の際には実に日本人一人の一生分くらいの芋が、アツという間に農家達に、半ば取り合いに近い形で分配されたほどです。この人気こそは我々にとつての最大の追い風であり、同時に我々自身がサツマイモの試験を続けようと思う一番の理由と言えるかもしれません。今後はそれこそ現地の人達が、どこの家庭でも毎年腹一杯サツマイモを食べられるように、栽培から種芋の保存、そして育苗まで、更に実践しやすい技術の確立に努めて行きます。

人材の育成を目標として

今後農業計画の成果を定着させるためには、作物だけでなく人材の育成がますます重要になってきます。その先頭を行くのはこれ

で文字通り我々と共に働き、共に失敗に泣き、共に成功に喜びながら経験を蓄積してきた試験農場の担当農家達です。「俺自身がこの数年間栽培試験をやってきた種だ。品質は保証する。安心して播いてくれ」と、今や我々に代わって周りの農家に対して自信をもって指導に当たってくれる頼もしい人材に成長してきました。

おかげで彼らを仲立ちにしてたくさんの方農家達との出会いにも恵まれ、昨秋には冒頭に紹介した通りこれまでにない賑やかな収穫祭も催すことができました。いずれにしても最後の最後に残るのは彼ら現地の農家と作物だけです。少しでも多くの成果が、彼等によってアフガニスタンの将来に引き継がれることを願いながら、これからも一つ一つの積み重ねを大切にしていきたいです。

アフガニスタンの農村を取り巻く情勢はあらゆる面で厳しくなっています。しかしそれでも現地の人達は明るく逞しく生活しています。日本でもアフガニスタンでも平穏な生活を求める願いは同じです。我々はアフガニスタンの人々が安心して食べていくために投じた一石が根付くよう、これからも一生懸命活動していく所存です。今後も我々の活動に変わらぬご支援を頂ければ幸いです。どうか皆様も平穏な日々と共にありますように。

◎ワーカー通信

現地スタッフに聞く

PMS病院会計担当

村井光義

最近、スタッフに食事について聞いています。おかずは何か、小麦は毎月何袋必要か、肉はどのくらいの頻度で食べているかなど。専ら季節の野菜を食べ、肉はお客が来た時にのみ。主食ナンを作ると小麦を買わず、玉蜀黍の粉末を使う家族もあった。原油高の影響で軽油、エンジンオイル、交通機関の運賃、料理油はもちろん、石炭、小麦、米、豆類など全ての値段が上がり続けている。

これを機会に、食事に関して今までのやり方を見直すことにした。ベシャワール会は現地に沿った活動を続けており、食事も例外ではない。無駄の省き方は、スタッフに家庭での食事を聞くのが簡単で、一般的なことだから。食事に限らず現地でのあり方は彼らに聞き、実際に見ることが一番良い。答えは私達の目の前にある。そこで冒頭の質問となった。

私達が何も感じなくても、現地の人達には贅沢なもの、贅沢な使い方があった。「前々から思っていたが……」と次々と色んなアイデアを出してくれた。彼らは遠慮していたのか、または他の人からのクレームが自分に向けられるのを避けてい

たのかもしれない。具体的には、規定のメニューだからと値段が二倍にもなった米（ナン）とも注意していた）を食べ続けていたり、おかずに欠かせないトマトをペースト缶で代用したり、一般家庭では考えられないことが分かってきた。ここをひとつの家として考えれば、そう難しいことではないのに、一度慣れたものを変えるのは手間と時間がかかり、今まで楽をして手を付けずにいた。始めてみると、彼らの内側の土台のようなものを知ることは新鮮で、新たな習慣が出来る過程を楽しむ余裕が出てきた。

みんなの案に健康を意識した考えを加えた。一食あたり三〇cc以上使用していた油を半分以下に調整した。ここでは油、砂糖でカロリー摂取している。そのため高血圧、糖尿病が多く、心臓発作での突然死もよく耳にする。一家の大黒柱が倒

アフガン流、

休日の過ごし方

灌漑用水路建設担当

近藤真一

休日には休日らしく？

カベチヨロ(ヤモリ)が、今日も鳴いている。

れるとその家族の行く末は目に見えている。親戚同士の結びつきは強いが、どの家族も大した余裕はない。普段は何に對しても量が減ることに抵抗を示すが、そのことを説明すると納得したようだ。食事など小さい事と思われるだろう。しかし、その当たり前の感覚を彼らから奪ってしまったら、少しずつ実際のあり方と離れてしまう。いつも難しく思うのは、気をつけていても一緒に働くことで良い影響だけでなく、無意識に悪い影響も与えてしまうことだ。

PMSの活動に愛着を感じ、病院のため、患者のため、家族のために一生懸命なスタッフと一緒に働くのは楽しい。これは日本から来て、いづれ去る者の安易な気持ちだろう。昨年まで都市部では少なかった停電は毎日六時間以上あり、政治も安定せず、物価高は止まることを知らず、先行きに不安を感じる中で人々は暮らしている。私達に彼らの代わりは務まらない。この国で生きていくのは彼ら自身である。

木曜日、現場の仕事は午前中で終了。十五、十六時には宿舍に着く。

金曜日、休日。

休日にやることといえば、寝るか食うか読むか……。バザールへの外出禁止が、かれこれ一年ぐらいか、それ以上続いている。正確には覚えていない。外出と言えは仕事に行くときぐらい。現場、宿舍、現場、宿舍、現場、宿舍への往復が、ひたすら続く。しかし、現場勤務の人はまだいいのかもしれない。現場と言っても広い。用水路の頭から尻尾まで、車で走っても一時間弱はかかる。広大な自然の中で、仕事をするだけでも清々しい。

良い気分転換になる。それに比べると、事務所勤務の人は私からみると気の毒だ。宿舍から市内の事務所へ、そして事務所からまた宿舍へ……。

一週間に一度の木曜の午後。一週間に一度の金曜日。日本に住んでいたら、仕事の無い日は気晴らしに、映画をみたり、買い物したり、ただぶらぶら外に出てみたり。次の日に仕事が無いのであれば前の晩に日本酒でも一杯ひっかけ、ほろ酔い気分次で次の日はゆっくり朝寝坊したり。日頃の鬱憤を、ストレスを、欲求不満を解消すべく、休日をごすのさだろう。

しかし現実には甘くない。我々ができることといえば朝寝坊、昼寝坊、夜寝坊、時々飯を食って誰かとおしゃべり、本を読んだりゲームしたり、たまの休日に仕事に出てみたり、おおなんだ休みの日も意外とおもしろいじゃないかと思いついてみたりと、こう改めて考えてみると日本で過ごす休日よりもこちらで過ごす休日の方が体を休められてより休みらしい休みなのではなからうかと結論を出してしまいたいそうになるくらい平穩、安泰な休日である。

日本に帰って「休日の過ごし方」なんて聞かれて、娯楽が無いねなんてよく言われる。

どちらの休日が良いのか悪いのか、好き嫌いは人それぞれなので話しても仕方がない。日本では日本での休日の過ごし方があるし、こちらではこちらでの休日の過ごし方がある。私はわたし、あなたはあなた。

孤独の友は「カベチヨロ」のみ

休みの日は、とにかく人と会わない。同じ屋根の下で暮らしているにもかかわらず、皆各々の部

屋に籠もっているため会えないのである。会ったところで何か一緒にしようなんてことは無いが、夕方晩飯時になるまで誰も会わないときさえある。

朝、目が覚める。朝飯を食べにリビングに行く。誰もいない。部屋に戻り、布団の中で本を読みだす。眠くなるとそのまま眠り、目が覚めるとまた本を読む。昼飯を食べにリビングに行く。誰もいない。部屋に戻り、布団の中でボーとする。私を置いて、みんな日本に帰ったらしい。「ギイ」と、部屋に響く鳴き声一つ。

ムツラーへの授業料

ジャララバード事務所の会計担当

神代大輔

ムラ・サーブ

ジャララバード事務所の会計室の片隅にその箱が置かれたのは、今年の春ごろだった。

もとはお菓子が入っていた小さなその箱には、コピー用紙の切れ端が貼り付けられ、ミミズがのたくったような文字が書いてあった。中にはなぜか少額ながらお金が入っていた。

これとほぼ同時期、事務所には見知らぬ男が入りしていた。車両や発電機の修理のため、バザールからメカニックを呼んでくることは多々ある

「今日もやっとなってきた。カベチヨロが。お前はヤモリの仲間か、俺の仲間か。いつもはどこかに隠れて鳴き声が、足音が、聞こえてくるのみカサカサと。人が恋しくなると、ふと出てきて静止。「ギイ」と鳴けども、私にヤモリの言葉は分からない。お前はいつものカベチヨロか、それとも別のカベチヨロか。見分けることも困難な、そんな二人の友情もしばしのお別れ、さようなら。あつという間に過ぎる休日。今日も充実した一日でした、明日のために。これがアフガン流、休日の過ごし方である。

ことなので、特に不思議にも思わず、彼もメカニックなのだろうと思っていた。が、彼はいつも故障中の車には向かわず、事務所の敷地内にあるモスクへ向かっていた。

よくみると、真っ白な現地服は油で汚れた形跡などない。しかも時折、彼のためにモスクへ昼食が運ばれている。

「あれは、いったいどこの誰だ?」と事務所のチヨキダール(門衛)に尋ねてみた。

「食事だってタダでできる訳じゃないんだぞ。毎度、毎度、部外者にタダ飯を食わせてんのか」

「彼はムラ・サーブだよ」

とチヨキダールの頭のマーシヨックが答える。

ムラと僕の耳には聞こえるが、手元の電子辞書では「ムツラー」IIイスラム教の宗教学者である。事務所のモスクでスタッフに講義をしているらしい。いつのまに、そんな人を呼んでいたのか。

そう言えば、レンタカーの運転手の中に一人、ムラと呼ばれている人がいるのだが、彼はなぜドライバールをしているのだろうか? ムラの仕事はし

ているのか？

みな、すずんで募金

で、前述の小箱はムラ・サーブへの授業料(?)を集める募金箱だったのだ。

日ごろから熱心にお祈りし、信仰心の固まりのようなアフガン人である。どれくらいお金を入れるのだろうか。最大の山場である給料日がやってきた。

給料は会計室で渡すので、募金箱は否が応でも眼に入る。会計スタッフのカーベルが、給料をもたらしたスタッフに対し、募金箱について説明している。そのおかげで、事務所で働いていないカナルスタッフまで募金している。あんだ達は、ムラとは会ってないだろうに。しかし、たとえ少額でも募金して当然という感じで、募金箱にはどんどんお金が入っていく。

さて、ようやく給料も配り終わり、箱を開けて集計してみると、明らかにパキスタンルピー札が多い。おかしい、給料は全てアフガニー紙幣で渡しているのに。

折からのルピー使用禁止令のおかげで、バザールで使いにくくなったルピー紙幣を処分して行ったような募金箱の中身。苦笑いのカーベルからは「この金でカバブ食べようよ」と呆れる一言。

「おいおい、ちゃんと、渡して来いよ。レシート書いて、受領のサインも忘れるなよ」

と、彼を会計室から叩き出して、その日の仕事を終えた。

はたして、ムラ・サーブの手元にくらのお金が渡ったのか。僕はいまだにそのレシートを見せてもらってはいない。

炎天下のチャイ休憩

灌漑用水路建設担当

松永貴明

これを書いている六月初旬は、現地では最も暑くなる時期。数字を見ると嫌気がさすから、温度計は見ないので確かなことはわからないが、日中の気温はおそらく四五度前後、もしかしたら五〇度を超えているかもしれない。

水路現場はまだ涼しい朝五時半から始まり、一〇時に三〇分間のチャイ休憩、一三時まで仕事をしている。

ともかく暑い炎天下の中、作業をやるもんだから、一〇時のチャイ休憩はすごく重要。時間になると、木陰が近くにあるところはその木陰で、または現場に点在する見張り人のテントで、全く日陰が近くにない場合はダンプロトラックなど大型車両で無理やり日陰を作って、太陽光線から避難する。透明のカップにたっぷりとぎらめの砂糖を入れ、緑茶を注ぎ、カップの底に砂糖を沈殿させたまま、グイッと飲む。少しだけ疲れが取れた気になる。もちろん、チャイだけでは物足りないの、ナンと水路現場基地コック長の特製のポテトチップスがでる。

チャイ、ナン、ポテト、飲みながら、食べながら、三〇分間の休憩時間を過ごす。そんなとき、次の作業をどうするだとか、あそこの造成はどう



トラックの日陰で休む水路の作業員たち

しようとか、アフガン人スタッフ達と仕事の話をしているのかと思いきや、たいがいバカなことを話している。例えば、

「昨日、ラジオで言ってたんだけど、クナール州で一八〇歳のじいさんが死んだらしいぞ」

「えっ!! ひやくはちじゅう」

「うちの村にも一二九歳のじいさんがいるけど、さすがに一八〇は聞いたことねえなあ」

「ええっ!! ひやくにじゅうきゅう」

聞き間違いではなく、確かに彼らそう言っていた。真偽の程は???

こんなことも。

「ミスターマツナガ、まだ結婚しないのか?」

と、余計なお世話を言ってくるスタッフがいる。アフガン人男性は二〇歳前後ではほとんどが結婚するので、この手の話をよくしてくる。

「それには、まず日本に帰らねえとなあ」

と、帰国を示唆するように意地悪く答えると

「おめえはもう八年(実は四年)もこっちにいるだから、半分アフガン人だ。こっちで結婚しろ。」

相手はおれが探してやる」

「誰が半分アフガン人だ、誰が！」

「おうおう、心配すんな。土地ならおれんとこをちよつと分けてやるよ。そこに家建てて住めばいい。なんなら両親もここに連れて来い」

と、勝手に一人で盛り上がりつつある。それを聞いている周りのスタッフはゲラゲラ笑いながら、

近在の農民に支えられた セキユリテイ

ジャララバード事務所渉外担当

芹沢誠治

過剰な警護が却って危険なことも

今回は、会員の皆様が大きな関心をお持ちの、セキユリテイ問題について書きます。

日本人ワーカーのセキユリテイに関し、中村医師は、常時、細心の注意を払って下さり、オフィスにとっても、その対策は最重要課題です。なぜなら、万が一、ワーカーに事故が起きれば、昨年の韓国人誘拐事件と同様に、ジャーナリズムによって大きく報道されて、PMSは緊急の一時撤退が余儀なくされるのが目に見えているからです。そうならば、御家族の心配もさることながら、長年に亘って進行中の水路工事の中断という最悪の事態を招くことになりかねません。

アフガニスタンは戦時下であるし、大早魃かんばつ、物

ナンをちぎり、ポテトを頬張り、チャイを喉に流し込む。

あつという間に時間が経ち一〇時半になると、スタッフはそれぞれの持ち場に戻っていく。三〇分前まで灼熱の現場にいたことは、おいしいチャイとバカな話ですっかり忘れ、作業を再開する。こんな感じで日々水路現場はやっていきます。

価の急激な高騰による生活の逼迫ひっ迫で、いつ何が起ころうとも当然と思われる状況が、ここ数年の間、続いています。日本大使館から、国連の情報に基づいて、日本人ワーカーの誘拐計画情報、自爆テロ情報等が、毎月三回以上、送られてきます。この国連情報によって、カーブル本省から、我々が活動しているニングラハル州の情報局、地方警察局に緊急通達が届き、政府役人やNGOの安全対策組織の担当者が、ひっきりなしに、PMSのオフィスに訪れてきます。

中村医師の基本方針は、一言で言うところと政府関係に対しては、「面従腹背であれ」ということです。これは、説明が非常に難しいのですが…。

具体的な例を挙げて説明すると、地方警察局がPMSの活動を保護するために、警察車が共に行動すると言ってきます。当然、善意・好意で言ってくるのですが、これを受け入れると、却って危険が増すこととなります。政府反対勢力の当面の標的は、政府役人・軍隊・警察関係であり、共に行動するとPMSも標的となって巻き込まれることになりかねません。従って、無碍むげに断る訳にはいかず、「ありがたい話ですが、共に行動するのではなく、PMSの活動地域のパトロールだけをお願いします」というところで手を打ちます。

アリアナ大地の心

人と花

甲斐大策

11

三十数年前、カーブル空港到着ロビーに出た私の一家を待っていたのは、絹のルンギイ（ターバン）を頭に、真紅の刺繍に彩られた上着をまとい、パクティア・パシュトゥンの正装に威儀を正した兄弟、ハジだった。両腕に抱えた花束は、ハジの上半身を隠してしまう程に巨大なものだった。

サラーム、サラームと大音声で連呼しながら私の父の前に進み出たハジは昂ぶる心に涙ぐみ、ようこそパードル（お父さん）と大きく両手を掲げる。

おうおうハジさん、あなたがハジさん、サラーム、サラーム、と父は慣れない抱擁の交歓をぎこちなく努める。パクティアの山の民の心と明治生れの九州人の心は、共に眼を赤くする中、見る見る通い合っていくのだった。

王族出席の場や外国からの貴賓歓迎の場で見られる、花束を捧げる少女の姿などからハジが思っていたに違いない花々はフロアーに散り、周囲の人々がほほ笑みながら拾い集めることになってしまった。

小洒落た欧風の習慣など何ひとつ識らないハジが必死に試みた歓迎の一場面は、滑稽でも無惨でもなく、全身全霊をあげて熱い心を突きつけてくる愚直なパクティアびとそのものを見せてくれたのだった。

カーブル空港での思いがけない豪華の後の一ヶ月余、私たちの旅のすべてを補佐してくれた兄弟ハジは毎朝、父と母の部屋へ現れる時、どこまで調達してくるのか必ず、何がしかの花を一輪持ってきてはコップに差してくれたのだった。

次から次へと厄介な話が舞い込み、一時は応対に右往左往していたのですが、私はある時期から、中村医師がそれとなく言っていたPMSの安全性の高さに気づきました。

予期せぬトラブルへの備え

一時期、カーブル本省への、PMSの活動報告が途絶え、いろいろな問題が生じたのですが、最近、本省のお役人、ニングラハル州の経済省・灌漑省のトップの方達が、カナル（水路）の現場に足繁く視察に来られるようになりました。その現政府のお役人達が、完成間近の水路を見て、心から感動し、感謝しており、本気でPMSを支援しガイドする気持ちになっているのが、実感として分かりました。

一方の反政府勢力ですが、こちらは、組織として、歴然と表面化して存在しているのではなく、近在の農村のなかに、深く静かに実体として潜んでいるでしょう。そして近在の農村の人達こそ、PMSの二〇年以上に亘る医療・井戸・農業・水路の実際活動を、まさにその目で見つめ、恩恵を受け、心の底から感謝している人達なのです。この村人達が陰ながら、PMSを支持し、保護してガードしてくれているのです。という事は、PMSはある意味、対立する両サイドから保護されていることになりました。

私はこの事実が気づいたとき、「PMSの二〇年に亘る実績こそが、人々の信頼と保護を育て安全を生み出している」という実感が、自分の身体に染み渡っていくのを感じました。

ただ、だからと言って、セキュリティに関し、楽観と油断は許されません。戦時下であるこ

と、また、大旱魃による物価の急騰で、いつ暴動や反政府活動が突発するかわからず、それに紛れて、強奪事件が起きる可能性も高いのです。四川省の大地震もそうですが、事故は全く予想のつかない形で突然、勃発します。

仕事を進めカナルを完成するためには、中村医

スタッフ一丸となって 小さな命を救う

ダラエメール診療所医師

西野恭平

ローテーションから常駐体制へ

お久しぶりです。ダラエ・メール診療所の西野です。

ダラエ・メールはまた長く暑い夏が始まりました。去年の夏、下痢で一日中トイレにこもっていた日やマラリアで日本に帰りたいと思った日などが恐ろしくも懐かしく思い出されます。今年もまだ経験していない腸チフスやリーシュマニア、サソリなどの現地特有の病気に怯えつつ、始まったばかりの夏が早く終わることを待ち望んでいます。個人的には他のスタッフに助けられてばかりの一年間でしたが、診療所にはいくつかの変化がありました。

医師が一人から三人が増え、一ヶ月ごとのローテーション方式から診療所専属の医師となりました。

師の言う通り、日常生活の中で、村人達との関係を大切にし、細心の注意を払っていくことが、最も大切なことです。どうぞ会員の皆さま、現地ワーカー達のセキュリティに関する配慮を御理解頂き、今後とも支援をお願いいたします。

それに伴い、スタッフ間のコミュニケーション、医師の診療所に対する責任感、患者との信頼関係などが強まり、診療に良い影響が生まれています。

また、去年の十二月よりワクチン接種を開始しました。最初は一日数人程度だった接種人数も今では三〇人程度に増え、着実に浸透してきています。

しかし、一番の変化はそういった形や数字で表れるものでなく、診療所スタッフ自身の中に起きていると感じています。重症の患者を都市部の病院へ送らず自分たちで対応するようになったり、患者のために診療所をより良くしようと話し合ったり、患者の気持ちを理解しようとする時間以上かかる村へ実際に歩いていってみたい、とスタッフの意識が高まってきています。

ダラエ・メールを国内一の診療所に

そんなスタッフの熱い気持ちを本当に強く感じたい日がありました。重度の喘息発作の子が診療所に入院した日、心配だからと夜中一睡もせず患者の様子を見続けた看護師のアーベットさん、当直でもないのに働き続けたハファイズ医師、点滴や薬の準備をしたグラン・モハマッドさん、医療スタッフではないものの患者のために一晩中様々な

手伝いをし続けたグラン・ジャンさんやサイド・モハマッドさん、その時診療所にいた全てのスタッフが協力し、夜中一度は止まってしまった心臓を蘇生させ、命を救うことができました。

一つ一つの変化は小さいかもしれませんが、そんな一つ一つの経験を通して、この診療所の仲間が今、一つのチームとして動き始めていることを感じています。都市部にある政府や国際機関の大

学校に通い始めた スタッフ

PMS病院薬局担当

河本定子

開業の資格を取りに

昨年十月下旬よりペシャワールにもどり、PMS基地病院の薬局で、再び活動しています。四ヶ月半ぶりでPMS病院スタッフの人々に暖かく迎えてもらいました。

スタッフの中にはハンセン病の治療で、特別な訓練をしてきて病院とともに育ってきた診療要員がいます。五名の長年に亘って働いている看護職員と薬局アシスタント一名が、今年一月よりオールドバザール近くのメディカルスクールに通い始めました。この五名の看護職員以外の理科系の学校を卒業している看護職員一名は、去る九月よりPMS病院から五分位のメディカルスクール二年

きな病院のように十分な設備や検査、薬などがあるわけではありませんが、今ではリーダー格であるアーベットさんやサルフラーズさんを中心として「ダラエ・スール診療所をアフガニスタン一の診療所にするんだ」と本気で言っています。

決して順風満帆とは思いませんが、この診療所が「アフガニスタン一の診療所」になる日を夢見て、長く暑く辛い夏を乗り切りたいと思います。

コースに通っています。この学校を卒業すると薬局を開業できる資格を取得できます。

文科系の卒業生五名のうち、四名は看護士のアシスタントのディプロマ（修了証）、そして一名はファマシーアシスタントのディプロマがもらえます。

今後スタッフの仕事に対する励みになると同時に、将来的にも安心できると考えられます。無事卒業できることを願っています。

家庭菜園にチャレンジ。しかし……

パキスタンは、物価がどんどん上がって、暮らしに影響が出て来ています。

このような状況の中、私は生活を快適にするくふうをすることにしました。

そこで、今年は家庭菜園にチャレンジ。一月に、ほうれん草の苗をスタッフハウスより分けてもらってベランダで育て始めました。八百屋で売っているねぎを数日放置しておけば、根が出てきます。それもいっしょに鉢に植えてみました。

冬は、毎日水やりの必要もなくようすを見ながら、でいじょうぶです。

毎朝ベランダの網戸をあけて、おてんとうさま

ほうれん草とねぎにおはようと挨拶をして、毎日葉が伸びるのを見て、いずれ食べられる日を楽しみに過ごしていました。

ある日の朝ほうれん草の葉が一、二枚足りないように見えました。よく見てみると葉が食いちぎられているではありませんか。びっくりして、心配しながらおそるおそる次の日注意深く見てみると、やはりまた葉が食いちぎられた後があります。一体何者がベランダに侵入してきているのか。正体を確認したいと思いました。

数日後の朝礼で中庭から上を仰ぎ見ると、ベランダのすだれの向こう側に、朝日を浴びて何者かの影が映し出されるのが見えました。その何者かはヒヨコヒヨコと歩いて葉っぱを突っついていているようにみえました。犯人は、小鳥だったのです。ゲストクォーターのベランダには侵入者が、いっぱいやってきます。何種類かの鳥や、猫はベランダの散歩、りすは、ベランダと屋上階下のぶどうの木を忙しく飛びまわっています。

ほうれん草は、無事に収穫でき、ねぎとともに味噌汁にして食べました。初めての収穫なので、日本人ワーカーに一口ずつ食べてもらいました。

最近、ベランダのぶどうの木をつるを利用して、ぶどう棚が出来ました。ここで本を読んだりうたた寝をしたり、リラックスのできる空間ができました。今は、新たにぶどう棚の下に枝豆と数種類の野菜を植えた鉢を並べました。また育てて、枝豆とペプシで、もっとも暑い猛暑を乗り切ろうと思っています。

いつも応援してくださっている会員の皆様、友人、知人をして家族に感謝します。ありがとうございます。

●現地訪問報告

人災と天災の荒野

— ないものともあるもの —

ペシャワール会事務局長

福元満治

この数年、パキスタンとアフガンの国境付近の整備が進んだ。数年前までは小屋だったアフガン側のイミグレーションはビルになり、廃車のパーツを商っていたコンテナ店舗は再開発されて道路も舗装された。

目立つのは昨年までは表に出なかった米軍で、完全武装して警備に当たっている。アフガン人の副院長は壁に押し付けられて身体検査された上、犬を嚇けられたと憤った。偵察用ヘリをビデオ撮影していた私を認識すると、旋回して至近距離から威嚇することもあった。

私たちの工事現場付近では、装甲車からワインの空瓶を投げ捨てたり、あげくに装甲車ごと用水路に転落することも一度ならずあった。アフガン戦争末期のソビエト兵のように、マリフアナ喫煙の噂も広がっている。兵士の物々しさと苛立ちが、袋小路に陥った「対テロ戦争」の出口のなさを物語っている。アフガンは、一九七九年末のソビエト軍侵

攻以来一〇年間で、二〇〇万人の死者と六〇〇万人の難民を出した。

ジャララバードに向かつてしばらく車で走ると昨年と風景が違う。二〇〇二年以降広がっていた赤白ピンクのお花畑が見当たらない。いくら目を凝らしても小麦畑だけでケシ畑がないのだ。理由はケシ(アヘン)相場の暴落と国際的な小麦価格の急騰である。ケシはタリバン政権末期には撲滅寸前で、一キロ五万ルピー(約一〇万円)だったものが、政権崩壊後過剰となり(世界の生産量の九四パーセントといわれる)七千ルピーにまで下がったのである。笑えない冗談である。

その後も内戦、タリバン政権による実効支配、米軍による報復爆撃と戦乱が治まらない。

戦争ばかりか二〇〇〇年夏からは、放置すれば一〇〇万人が餓死する(WHO世界保健機関の警告)という大旱魃にも見舞われている。一〇〇パーセントに近かった穀物自給率は、早魃で六割を割り、小麦や食用油が倍近くに高騰した。貧しいものにとっては、二重三重の災厄である。

それでも事務所のあるジャララバード市内に入ると、奇妙な活気が町にあふれ場違いな豪邸も町に増えている。空爆・占領とセツトになった復興バブルである。軍だけでなく復興支援にきた国連やNGO(非政府組織)の御用達で賃金、家賃も急騰し、甘い汁をたっぷ

り吸った富裕層もいるのである。

「国際社会」による復興援助資金一五〇億ドル、米軍の戦費三〇〇億ドルと言われている。その町を一步郊外に出ると、土漠の荒野に強制帰還で戻された泥造りの難民キャンプが広がっている。二〇年前に難民となり二年前にパキスタンから追い返された人々のキャンプだ。私たちはそのキャンプに井戸を掘っているが、そのうちのひとつがある小学校を訪ねた。いく張りかのテントがあるだけで、五百人の男女の子供たちは炎天下での青空学級である。まだ気温は三〇〇度程度だが、六月になれば四〇度を超す。地べたに座り、前にたつ同級生の朗読にあわせ大きな声で唱和する。ノートも満足にない子供たちの鬢りのない瞳と屈託のない声に、私の渴いて衰弱しかけた魂が鼓舞される。

ないものにも掌の中の風があり、
あるものには崩壊と不足しかない。

ペルシャの詩人オマル・ハイヤームの「ルバイヤート」(四行詩)の前句二行である。私はどちらの側にいるのか、しばし自問する。もちろん「あるもの」の側である。「ルバイヤート」の後句は次の二行である。

ないかと思えば、すべてのものがあり、
あると見れば、すべてのものがない。

(小川亮作訳 岩波文庫)
二〇〇八年五月「西日本新聞」連載の一部を再録

●ワーカーOB報告⑧

ニジェールで

植林教育とかまど作り

元・灌漑用水路植樹担当

神戸秀樹

ベシャワール会の皆様、お久しぶりです。二〇〇四年から〇六年まで現地ワーカーとして、アフガニスタンで働かせて頂いた神戸です。私は、現在JICA(国際協力機構)青年海外協力隊員として、西アフリカのニジェールで活動しています。ニジェールという国は、国土面積が一二六万平方キロ(日本の三・四倍)ありますが、このうち約六五パーセントをサハラ砂漠が占めており、国土の一・二パーセントは年降雨量が二〇〇〜四〇〇ミリと少ないサヘル地帯です。こうした厳しい環境の中、国民の八〇パーセントは農村部に居住し、自給的な天水農業を営んでいます。また、この国は、度重なる旱魃や人口増加により、年々進む「砂漠化」が深刻な問題の一つとされています。そうした環境の中、私に求められているのは、

「砂漠化防止」のための環境分野の活動です。まだ赴任して一年足らずで、大きな成果を挙げるには至っていませんが、今回、報告する機会を頂きましたので、私の現在行っている二つの活動について書かせて頂きます。

一つ目は、小学校で行っている「学校植林」です。APP(生産活動実習)という、日本の総合学習のような時間を使わせてもらい、ニーム(学術名:

Azadirachta indica)という木の苗木を作っています。今まで苗木の確保、苗木作成に係る必要物資の準備、食害対策は父兄と学校が協力して行いました。また、毎日の水遣りは子ども達が責任を持ってやっています。この活動は、環境教育の一環と捉えています。つまり、まず、子ども達に「木を植える」ということを実践を通して学んでもらい、その上で、「木の大切さ」を感じ取ってもらえればと思っています。

二つ目は、村の女性と行っている「改良かまどの普及」です。改良かまどは、粘土と家畜の糞を使って作るのですが、お金をかけず村にある材料で簡単に作る事ができます。熱効率が良く、薪の使用を削減できるなどの利点があります。こうした利点を理解している現地人は、こちらの言葉で「マガニ・ハマダ」(砂漠の薬)と言うそうです。これを小学校、識字教室などの施設を通して、女性との信頼関係を作りながら、啓発して製作活動を行っています。料理は、女性の仕事ですが、かまどの製作には、村によっては小学生や男性も関わっています。啓発、製作には、かまどを使う女性だけでなく、子どもや男性など様々な人を巻き込み、より多くの人に「かまどの利便性」を認識してもらうことが重要だと考えています。

こうした活動が果たして、本当に「砂漠化防止」に繋がるのか?と自問自答することがよくあります。しかし、今はこうした活動を通して住民自身が、ニジェールで起こっている「環境問題」を少しでも考えてくれれば良いと一応の結論を出し、日々活動しています。今は、ほんの一瞬でも良いので、かまどに薪をくべる時、新しい木を移植する時、「木の大切さ」を考えてくれれば良いと思

っています。

アフガンとニジェール、同じイスラム圏ですが相違点や類似点などをつい比べてしまっています。しかし、今は目の前にいるニジェール人の立場に立つて考え、彼らが本当に必要とする活動ができたらと思っています。

▼寄附をしてくださる皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますようお願いいたします。

▼郵送方法の変更について▼

*一部地域の方々へは發送代行業者を通して別納郵送しております。差出人欄に代行業者名が記載されますのでご了承下さい。

▼郵便払込票の記入は分かりやすく▼

*ご寄付をお送り下さった郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、文字がにじんだり、かすれて判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

▼未使用の切手、ハガキを!▼

*会報の発送等の通信費に、年間数百万円かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。(使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい)

*一部地域の方々への会報は「料金別納郵便」でお送りしておりますが、その際も料金の代わりとして未使用切手で支払っております。

●事務局便り

*不安定な治安の中にあっても、事業は現地農民の信頼を受け確実に継続されてきた。

医療については、本部病院の活動許可が、実質二〇〇九年末まで延長された。ダラエヌール診療所では西野医師が診療を始め一年が経過した。中村医師も多忙な工事の合間を縫って職員にレクチャーすることがある。農業については、報告にあるようにサツマイモやお茶それに飼料作物の栽培にそれぞれ目鼻が付き始めた。

この五年間、もつともエネルギーが注がれた用水路建設は、第二期工事の完成も目前である。それだけではなく、クナル河の濁水により取水不能に陥った周辺農村の用水路修復も行われた。早魅と小麦の暴騰で瀬戸際まで追いつめられた農民の苦境は、取水セレンモニーに出席した一老農夫の、「うれしくて胸が痛い」という言葉に凝縮されている。

第三期工事は、緑化と開拓である。特に「自立定着村」は、早魅と食料暴騰を乗り越えるために必然的に生み出された構想である。用水路のメンテナンス技術を持った職能集団の農業自立村を創るのである。

私たちが苦闘を強いられる中、背後から銃を撃つような政策が政府によって打ち出された。アメリカの要請による陸上自衛隊のアフガン派遣案である。

戦闘部隊であるISAF(=NATO軍)への参加/後方支援は、これまで現地で培われてきた日本への信頼を根底から瓦解させ、活動する日本人の生命を脅かす歴史的愚行であることを、強く訴えたい。

◎村から

新参者であります。昨年三月に関東から福岡に越し、四月に会員になり、六月の九大キャンパスでの報告会に出てアンケートになにか書きましたら、事務局から呼び出しの電話をいただきました。以来、週一回程度事務局に出ることになり、今年の現地報告会でもちょびり手伝いをしました。この会のうれしいところは、ほんのちよつとした手伝いも、一〇年二〇年と会を支えてこられた方々から感謝され、わずかな会費でも確実に現地に生かされているという実感を持つことです。会の活動の全容を知ったのは、二〇〇二年に「ほんとうのアフガニスタン」(光文社)を読んでからです。笑顔の少年少女達の写真を見、中村医師のことば「これ以上の悲惨があるか」という中でも、ほとんどの子どもは死ぬまで生き生きとくらしています」を読むと涙が噴き出します。ああ、これは六〇年前の自分だと思ふところがあります。憲法九条は守りたいし、筑後川の山田堰も見に行きたいものです。(M)

医者、中村哲 [重版]1890円
用水路を拓く

アフガンの大地から 世界の虚構に挑む

●養老孟司氏絶賛 用水路建設事業の7年をつづった感動の記録

丸腰のボランティア

すべて現場から学んだ 中村哲編 [2刷]1890円

空爆と「復興」 [2刷]1890円

辺境で診る 辺境から見る

ダラエヌールへの道 [3刷]1890円

[3刷]2100円

医者 井戸を掘る [10刷]1890円

医は国境を越えて [6刷]2100円

ベシャワールにて [8刷]1890円

聖愚者 甲斐大策の物語 1890円

福岡市中央区渡辺通2-3-24 石風社 電話092(714)4838

アフガニスタンの診療所から 609円 筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 電話03(5687)2670

価格はすべて税込価格(税5%)です

会 則

- ①本会の名称をベシャワール会とする。
- ②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な情宣・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
- ③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
- ④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
- ⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
- ⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
- ⑨本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八二〇〇〇四一 福岡市中央区大名一丁目一〇一三五 上村第二ビル六〇三号) 〇九二一七三一―二三七二(内におく)。